

注解『七十一番職人歌合』稿(十四)

下 房 俊 一

凡 例

一、本稿には、『七十一番職人歌合』の中、第三十一番および第三十二番の注解を取めた。

三十一番 銀細工 薄打

【職人尽】

〔飛鳥井雅康 職人歌〕十番左 鮎うり

あひうらふたらさりけるよわれ人にとりをくれしとおもひぬるかな

〔吾吟我集 職人 一枚を万枚になす薄屋こそ金を打出の小槌なりけれ 〔訓蒙図彙 銀匠ぎんしやう しろかねざいく。 銀工

同。 〔長崎一見 職人一首〕三番右 白銀屋 止むるなら切羽をしても花を見ん草鞋脛巾でかけ廻り乍 ……右の歌、

止むるなら切羽をしてなりとも花を詠んとぞ。是、歌の本意なるべし。されども、草鞋脛巾でかけ廻り見んこそ、おこが

まし。是も鑢目いまだ失せず。随分きささをかけられよかし。 / 十四番右 箔や よきて吹く花にも風は金箔の散る

を惜しまぬ人はあらしな ……右は、花のあたりはよきて吹け、と有る心を含まれけるにや。本歌の心に叶ひて、面白く

こそ侍る。 〔人倫訓蒙図彙〕銀師 諸の金物これをつくる。此の中、近世、紙入の金物師、別に名乗簡板をいだして、

これをつくる。 / 薄師 老歩の金を四寸薄、五百枚に打つ也。 〔誹諧職人尽〕はく打 白かね細工 上人の顔に箔

注解『七十一番職人歌合』稿(十四)

置け御命講（史邦） 箔打は冬の紙帳に気をこらし（亀仙） 箔屋さへ障子明けたる暑さ哉（蓼和） こま鳥の音に似合はしきしろがね屋（長江） 白魚や生きて働く銀目貫（如天） こがねより涼しさ増され銀道具（蓼和） 〔今様職人尽百人一首〕 白かね細工 地金ちがねかけしわづかの金を沃懸たくにてやすりなをしてあとの湯加減 「しもふて明日の支度にかゝりや」「ほんに、はや輪祭だ。何でも飲みかけよふぞ」 はくや あくうちの後の仕上げの数見ればうつして光箔は輝く 「きつふ延びぬの」「いや、まだきつふかだが見ゆるは」「さればさ、ごん八殿、砂子はきらしつたか」 〔職人尽発句合〕 五十五番右 箔打 箔打が宿や砧の夜る昼に 両句ともに、させる文なきぞ。 〔職人尽狂歌合〕 箔うち 箔打も見とれん月もしろがねの光りを延ばす世界一枚 ……右、銀の光けしうは侍らねど、西の方屋（すまひとりの歌） いささか勝りて待るべくや。 / 箔打 照る月を御岳詣でや千金と箔打ち守る秋の夜の空 左、宇治亜相のふること、おかしげに取りなされたり。 ……仍、持と定めつ。 / 箔打 此の箔は翌へ延ばせと門に出て打ちも眺めん月の色よし ……右、月にめでてなりはひさへ怠りがちなる、もつとも興深くおかし。左の酢屋勘三郎、あまりに名のりこちごちしければ、なかなか名のりせぬ箔打の方に、ゆかしげは添ひ侍りぬべし。 / 箔打 秋の夜の千夜を一夜に箔打も打ち延べたくや月に思はん 左、詞残りて鳥や鳴くらん、の上の句にてとのへられし、よろし。 ……仍、以左為勝。 〔略圖職人尽〕 東屋の真屋の軒端に訪るる箔屋の槌の雨垂れ拍子

〔本文〕

卅一番

まさこ地の月かけみれはしろかねの
な、こまきたるこ、ちこそすれ
いけ水のつき影見れはしろはくの
てゐになりてもひかりやはけつ

左歌、みるやうによみたり。右は、始中終

まさこ地―〔類〕真砂地 しろかね―〔類〕白かね
まきたるこ、ち―〔類〕蒔たる心地
いけ水―〔類〕池水 つき影―〔忠〕〔類〕月影 見れは―〔類〕みれは
てゐ―〔明〕でい〔類〕泥 ひかり―〔類〕光

よくかなへり。てゐにけつなと、尤よせ
あり。可勝にや。

はいらうのたらざりけるかわれに人
とほされしとおもひあはねは

恋すとてあをみはてたるひたちかね

いつ色よしとひとにみえまし

左右ともに、哥さまいやし。又、逸興侍ら
す。可為持。

白かねさいく

なんりやうの

やうなるよき

かねかな。

はくうち

なむりやう

にて、

うちいてわろ

き。



てゐー〔類〕てい 尤ー〔忠〕心

はいらうー〔類〕はいらふ われー〔類〕我

おもひあはねはー〔忠〕おもひあはぬは

あをみはてたるー〔類〕青みはてたる

ひとー〔類〕人

白かねさいくー〔白〕〔類〕銀さいく〔忠〕世一番銀さいく

なんりやうー〔白〕〔忠〕なむりやう

よきー〔白〕〔忠〕〔明〕〔類〕ナシ

かねー〔白〕〔忠〕哉

はくうちー〔白〕〔類〕薄うち〔忠〕薄うちげ

なむりやうー〔白〕〔忠〕〔明〕〔類〕なんりやう

うちいてー〔白〕うち出テ〔忠〕うち出

【語注】

◎銀細工は、銀の罫り金具を作る職人。

薄打は、金や銀などを槌で打ち延ばして薄（箔）を作る職人。

ともに、職人歌合に初出。

◎まさご地の月かけ 砂地に照る月の光。

◎なごまきたる 「魚子」は彫金の技法の一つ。金属の表面に小さな突起を、魚の子のように密に浮き出させる。

魚子を施すことを「蒔く」という。

◎しろばく 明暦板本は「しろばく」。日葡辞書（補遺）にも「Xirobaeu」と濁音表記。「月影見れば白（し）」から「白薄」と続ける。「白薄」は、銀の薄。大和絵などで、銀薄や銀泥は月光を表すのに用いられてきたから、その連想にもよるのであろう。

◎てゐになりてもひかりやはけつ 「泥」に、どろの意と絵具の泥とを掛ける。絵具の泥は、金粉や銀粉を膠で溶いたもの。白薄が泥になったからといって、輝きを失わないように、月影は泥水に映ったからといって、光を消さない、というのである。泥水に映る月影は、泥中の蓮の譬えからの連想か。

◎みるやうによみたり 「見るやう」は、「ことなく言ひ下したるさまながら、新羅の御前より眺望し下したらん、さこそは侍らめと、見るやうに侍る上に」（三井寺新羅社歌合、二十一審判詞）、「風にあまぎるらん桜、みるやうには面影覚え侍れど」（後京極殿御自歌合、十三審判詞）、「霞中帰鴈、景氣ことに見るやうにこそ覚え侍れ」（千五百番歌合、百八十一審判詞）など、俊成が判詞によく用いた評語で、『毎月抄』、『定家十体』にも、「見様」という一体を立てる。「見る心地す」（二十二番語注参照）などと同じく、歌に詠まれた情景が目に見えるようだ、という意味であろう（武田元治『見様』考―定家十体の内―〈大妻国文Ⅱ〉参照）。もっとも、この判詞が当を得ているかどうかは、例によって問題外である。なお、本職人歌合四十九番左、放下の恋の歌に対しても、「見るやう也」と評する。

◎てゐにけつなと、尤よせあり 「尤」は、忠寄本は「心」と読めるが、誤写であらう。「よせ」は、歌論用語で、

ある事柄に関連する言葉。縁語など。絵具の泥からとろ水を連想し、それに月影を関連づけた点を褒めたのであろう。

◎始中終よくかなへり 始めから終わりまで通して、言葉がよく調和している。

◎はいらうの…… 『飛鳥井雅康 職人歌』十番左、鮎うりの歌、「あひうらふたらざりけるよわれ人にとりをくれしとおもひぬるかな」を翻案したもの。

◎はいらうのたらざりけるか 『中世職人語彙の研究』は、香取秀真『日本金工史』（昭和七）を引いて、「はいらう」は「灰鐵」で、銀細工の細かい部分の接合に用いる、灰のように細末にした鐵（金属の溶接に用いる合金）であるとする（「はいらふ」の項）。従うべきであろう。なお、同書に、「配慮」を掛けていようとするのは、「配慮」という語が近代以前にあつたかどうかという点で疑問がある。単に、灰鐵が足りなかつたのだらうか、と解すべきであろう。

◎われに人どろほされしとおもひあはねは 「とろぼす」は、同時代の用例は管見に入らぬが、『倭玉篇篇目次第』に、

「冶トロモス」（九、ン）、「銷トロモス」（二百四十二、金）、「温故知新書」（尊経閣文庫本）に、「銘トロハカス」、「銷トロマカス」（ト、態芸）、「塵芥」（清原文庫本）に、「銚トロハカス」（土、気形）などある言葉と同類で、金属を溶か

すことと見てよからう。また、比喩的に、人を蕩けさせる意があつて、ここはその比喩的な意味を掛けたものと思われる。「し」は、打消の意志を表す助動詞「じ」であらう。「おもひあはねは」は、忠寄本は「おもひあはぬは」。いづれにしても、歌全体の意味に大差はないが、忠寄本の誤写であらう。「思ひ合ふ」は、互いに恋慕う意であるが、通常、和歌で用いる言葉ではない。「思ひ合はず」は、自分は相手をおもっているのに、相手は自分を思ってくれない、片思いの状態をいう（二十九番語注「おもひもあはぬ人」の項参照）。「合はず」に金属同士がくつつかない意を掛け、また、それから連想される、男女が「逢はず」の意をも掛ける。銀がよく溶けないでうまくくつつかないように、あの人私に蕩けさせられまいと、心を開かず、逢ってくれない。なお、『中世職人語彙の研究』は、「し」を過去の助動詞と取り、「自分にあの人がとろぼされたと思うほど、思いあわないのは」と解する（「はいらふ」の項。『新大系』も同様）が、やや無理があるように思われる。

◎恋すとてあをみはてたる 恋の思いで衰弱し、顔が青ざめるのである。「青みはてたる」から「常陸金」と続く。

◎ひたちかね 「常陸金」は未考。常陸産の金か。上に「青みはてたる」とあり、下句に「いつ色よしと人に見えまし」とあるから、青みがかつた、質の悪いものであろう。『新大系』は、「茨城県北東部一帯の鉾山から産した金・銀・銅。当歌では「青み」とあるので、特に銀をいう」とする。

◎いつ色よしとひとにみえまし 「色よし」は、形容詞とも名詞とも取れるが、いずれにしても、上句の「青みはてたる」に対して、顔色のよい状態を言うと同時に、美貌であること、ないし色男（女）を意味するのであろう。時代は下るが、「思ひ寄らずも色よき人を見そめて」（好色袖鑑、上―日本国語大辞典「いろよい」の項による）、「色よき妾者十二人抱へて豊後に下り」（日本永代蔵、三・二）などの用例がある。その「色よし」に、金や金薄、ないしその上質で色美しい物の意の「色よし」を掛けるか。幕末および明治のものであるが、「色吉、中色、常色、賈まがの私は真鍮、赤銅、青三印の属たぐひもあり」（道中女膝栗毛、上―角川古語中辞典「いろよし」の項による）、「古渡りの六分玉まがに、色よしの金足、こりやあ豪気な簪かんざしだ」（歌舞伎、月梅薫籠夜―日本国語大辞典「いろよし」の項による）の例がある。なお、『職人尽狂歌合』の箔打の歌にも、「此の箔は翌へ延ばせと門に出て打ちも眺めん月の色よし」と、薄の「色よし」と月の「色よし」とを掛けたらしい例がある。いつになったら、上質の金の色のように、顔色がよくなって、色男だと相手に見られるのであろうか。

◎左右ともに、哥さまいやし 左歌の「とろほされじと思ひ合はねば」、右歌の「いつ色よしと人に見えまし」などの露骨な表現を問題にしたのであろう。

◎逸興侍らす 十番語注「逸興」の項参照。

◎なんりやうのやうなるよきかねかな 「よき」は、白石本、忠寄本、明暦板本、類従本は脱す。「かな」は、明暦板本は「がな」と濁点を振るが、誤刻であらう。「南鑑」は上質の銀、または銀一般をいう。ここは前者。「かね」は金属の意。

◎なむりやうにて、うちいてわろき この「南鑑」は、一般的な銀の意と解してもよからう。「打出」は、金銀などを打ち延ばして薄にすることで、ここは、その出来具合についていうのであろう。銀は、金よりも硬くて、金のよう

にはよく延びないのである。銀細工と対照的な言葉がおもしろい。

【繪】

銀細工は、烏帽子、直垂、袴姿で、腕捲くりをして、金床の前に座し、左手の金箸で銀片を挟み、右手の金槌で打っているところ。左に、押木（作業台）。押木には鏝が打っており、ここに板を嵌めて鏝がけなどの作業をする。右に、工具または材料らしいものが入った箱。白石本、忠寄本、明曆板本は、金床の形を異にし、白石本、忠寄本は、金床の下に切り株で作った台を加える。白石本、忠寄本、明曆板本は、押木の描き方に小異。明曆板本、類従本は、箱を描かない。

薄打は、剃髪し、直垂、袴姿で、腕捲くりをして、台（石製か）の前に座し、左手に薄を入れた皮袋を持ち、右手の槌で打っているところ。左に、銀塊らしいものが入った器。右に、薄を入れる箱らしいもの二つ。

【参考】

○われわれが金細工オウゴンと呼ぶ金、銀、銅を細工する術においても、彼らは劣つてはいない。細工の優秀さと多彩さにおいて、また、金銀と銅とを混合させることで、シナ人やその他の東方諸民族を凌駕している。この合金によって、日本人自身の間ではなはだ珍重されている黒い銅（赤銅）という第三の金属を作り、それで刀 *catana* の鞘につける一種の道具（鏢）を作る。それには、金銀を彫刻する技術で彼らの間に評判が高く、尊敬を受けているきわめて優秀な職人たちによって彫刻された花や動物の細工がほとんどこされている。この種の銅にはさまざまなる木、草、鳥、水陸の動物、故事が彫刻刀（タガネ）で「原文欠如、彫りつけてあつて？」、それらはすべて自然を模しており、きわめてすぐれたものである。また彫刻刀で作られたこの手製の細工物を珍重するが、鑄造したものはたとえすぐれた物でも珍重しない。彼らはこの彫刻刀を使った細工に金や銀を被せること、すなわち金を銀で、また銀と黒い銅を金でもつて飾り立てることにおいて独特なものを持っている。これらはすべて彫刻刀によるのであるが、その細工物は絶妙で、

はなはだ優美であり、日本人の間にのみ見出されるものである。この技術にかけて彼らの間で尊敬されている卓越した工匠の手になる優秀、良質で真正な細工物は、今日までエウロッパには伝えられなかった。黒い銅と銀に金を被せて作った十字架クロスのいくつかは伝わったが、それはこの王国全土に数多くいる普通の職人の手になるものであった。都 Miyao にはこの技術の頭かしらとなる特定一族がいる。彼らは国王、公方 Cubo、天下 Tenga [Tenca] 殿その他の領主たちの細工物を作るが、その作品は非常に珍重されていて、たとえ小さな物でも、細工の完璧さや優秀さによっても、またそれに使う材料の完全さやその合金の仕方によっても、すこぶる価値がある。この一族は後藤 Goro と呼ばれている。われわれは彼らの作ったいくつかの作品を見たが、それはごく小さくて繊細な点で、これ以上のものがあるとは言えないほど完璧であり優秀である。それゆえ部分部分の完全さやその配列を問題外としても、もし鑄造したものであれば、これほど精緻にはできなかったと思えるくらいである。このことは誇張でも褒めすぎでもなく、実際よりも控え目に言ったまでである。

(日本教会史、二卷三章)

三十二番 針磨 念珠挽

〔職人尽〕

〔十二番本 東北院職人歌合〕十番

左

針磨

うりのこす我数はりをまきすて、ひろふはかりにすめるつきかけ

右

轆轤引 (巻首ノ作者名一覽二ハ「数珠引」)

さやけさは秋をためしにひくす、の露よりつたふそでの月かけ

左、ふるき風情、めつらしくとりなされて、いと、優に聞え侍り。人丸か哥の心かや。右、上下よろしく侍るに、露よりつたふ袖の月影、今一しほの色をそへて、心くるしく侍り。仍右を勝とすへし。

左

ふせほそる我身よされははりになるつれなき人めてよやか、ると

右

君もこす我もかよはぬ中なればろくろひきにてあはぬ恋哉

凡、彼是いつれも心有て、勝負弁かたし。但、左、今少おもひ入たる所有て、歌の姿まさりてや侍らん。

〔飛鳥井雅康 職人歌〕二番

針屋

月みれば影ものへはやはりかねのなかきよとていやはねらる、
す、屋

軒の露たまやの月のかけみればみか、すとてもこと足ぬへし

〔伝鳥丸光広作 職人歌合〕針磨・珠数引 いと若き人の為にはこまかなる物縫針の目社いるらし ずず引の弟子が不精

をする時は達摩程にや目を乱すらん 〔吾吟我集〕寄珠数恋 道心も起こる思ひの玉を繰りて来ぬ夜の数を身の所作にす

る 〔職人絵合詩〕十番 針磨・念珠引 好箇控針宜刺縫 細尖似棘又如松 阿誰磨斧遂成否 一笑書生学業備 手中

把玩衲僧家 百八丸珠聯不瑕 紐緒豈唯無患子 水精粒々木犀花 〔古今夷曲集〕同じ〔職人歌合〕中に、珠数曳の恋

恋や百八煩惱そくいべらのりの教へを背く珠数引 珠数曳 水晶の玉さへ磨く珠数曳が心の内やなどよくいにな

〔徳元〕〔長崎一見 職人一首〕十五番右 数珠や 行きて見むとたれも心は先立つめくるまぞ遅き数珠の花房 ……

右、くるまで遅きとは、寔に殊勝く。判者が心も数珠の花房に引かれ、心に袖を濡らし侍れ。〔銀葉夷歌集〕珠数挽

弟子候か何ぞと弟子が問ひし時露と答へて繋ぐず引〔舎水〕 針摺 耳つをに我が玉の緒も繋ぐべき望みは細き

針摺の袖〔方碩〕 〔人倫訓蒙図彙〕針摺 針立、これを用ゆ。諸流あつて変はれり。村田駿河、寺町四条下ル丁。奈良

弥左衛門、寺町四条上ル丁。江戸京橋南へ二丁目南大工町。 縫針師 針鉄師外にあつてこれを造る。都におみて、

根本、姉小路に住して其の名高し。中世、御簾屋といふものあり。今に至りてこれを名乗る。唐より渡す針、これを唐針

と号す。京針師、三条河原町角、福井、伊与、富永、伊勢、井口、大和、五条油小路。其の外、大津追分、池川、大坂塀筋にあり。江戸京橋四方棚、新橋小竹川丁。／ 珠数師 仏在世に出来す。是仏号の数執ケツなり。珠数功德経あり。数の百八なるは、煩惱の数を表するとかや。〔用明天王職人鑑 職人づくし〕糸もて通すみすや針、ほころびやすき浮き名をも、つなぐ数珠屋の百八の、思ひよる名を我が思ひ……

〔誹諧職人尽〕針すり 藤瘤に立つるは松の葉針かな〔吉

貞 綿に針包む心か雪の松〔正直 名月や針する膝の松の塵〔夜白 釣針に剣も崩さん鱸時分〔寥和 〕 念珠

挽 幾度の彼岸に逢ふや珠数の艶〔涼葎 珠数くりて蠅打つ人の片手かな〔雨軒 無量寿の年とり豆や珠数の玉〔咫

斗 浅草や珠数屋に隣る海苔の道〔豊水 咲く夜半もあやなし梅の玉木賊〔水馬 飛ぶ花も枯るるも挽くや珠数作

り〔釵尺 後の世の落葉かくなり念珠挽〔百二改 蛾道 刀豆の珠数も淋しし秋の数〔寥和 〕〔今様職人尽百人一

首 針師 管の針研ぎかけ磨き金銀の翠簾屋椽にほかに釣針 「できたは。いくほんじやの」「鉄針はどここの誂いじや

へ」／ しゆず師 世の中よ房こそ変われ拌み売り山の奥にもじゆずぞ磨るなり 「お経のじゆずを見せささい」「こ

れでござります」」「これは菩提樹でござります」〔彩画職人部類〕針 説文ニ、以鍼結衣曰縫。所_レ以_レ其縫者_ヲ

曰鍼。俗作_ル針也。又、本朝応神天皇十四年の春、百濟国よりふたりの婦人を貢とす。其の工みなる事、甚妙也。是縫

もの始めなり。其の製する所は、京都姉が小路翠簾屋をもつて世に鳴る。五十本を以て一匹といふ。帝王世紀云、大昊

制_ニ九針_ヲ、則縫針_モ亦始_ル于此_{ヨリ}。〔職人尽発句合〕十二番右 針磨 寒月や透きもるる光り針の如 ……針のご

とく光の冴えたる風情は一しほ勝りて、勝ち侍らん。／ 五十七番左 珠数引 千万の数こぼれけり柿の臺 珠数引が、

数こぼれけりとばかり、詞足らず。懐狭し。……笠縫が句の事がらも……少しは勝るべきか。〔職人尽狂歌合〕念珠ひ

き 我が業の数珠にあらねど秋の夜の月は数見る水晶の玉 ……右、数珠の文字を本末に分かちて詠まれし、よろし。同

等にこそ。〔略画職人尽〕緑なす糸繕りかけて数珠磨が玉にも貫ける色の柳茶

月を見は猶ものへはやはりかねの
 なかき夜とてもいやはねらるゝ
 いつとなくすゝやのまとの影なれば
 ひきいりてのみ月をみるかな

左右ともに、興なきにあらす。よろしき
 持と申へし。

なさけなきひとにこゝろをつくしはり
 身つからなとかおもひそめけむ
 ひとりねの身をもはなたてぬきれこそ
 わかたまぐらのふしとなりけれ
 これ又、よき持に侍り。

はりすり

こはりは

みつか

大事に

候。

念珠ひき

かすとりと

七へんの玉、



見は―〔類〕みは はりかね―〔類〕針かね
 なかき夜―〔類〕長きよ

なさけ―〔類〕情 ひと―〔類〕人 こゝろ―〔類〕心 つくしはり―〔類〕つくし針
 身つから―〔類〕みつから おもひそめけむ―〔類〕思ひそめけむ
 ひとりね―〔類〕独ね
 わかたまぐら―〔類〕我手枕 けれ―〔白〕ナシ

はりすり―〔白〕〔類〕針磨〔忠〕世二番針磨はりすり

みつ―〔白〕耳〔忠〕耳みつ

大事に候―〔白〕〔忠〕大事にて候

念珠ひき―〔白〕〔忠〕〔類〕念珠挽

かすとり―〔白〕〔忠〕数とり

むつかしき
そ。

【語注】

◎針磨は、針金を適当な長さに切り、これを砥石で磨って針を作る職人。なお、『日葡辞書』（補遺）には、「Farsuri. 日本人が病氣治療のために、身体の或る部分に針傷をつける（針を立てる）のに使う針を作る人」とあり、別に「Fariya. 縫針を作る家。また、それを売る店や家」の項を立て、『人倫訓蒙図彙』も、「針搦」は鍼医用の針作りで、別に「縫針師」を出す、本職人歌合の場合は、恋の歌、および絵とその中の言葉からすれば、縫針を作っていたらしい。

念珠挽は、梅檀、黒檀などの木や、菩提樹、木槵子などの種子、水晶、瑪瑙などの宝石等を切り磨いて、念珠すなわち数珠を作る職人。「挽」は、これらの材料を轆轤で挽く意か。『日葡辞書』に、「Iazuno figu. 轆轤で数珠を作る」(「Figi. u. jita.」の項)とある。

十二番本『東北院職人歌合』十番に、針磨と轆轤引。この「轆轤引」は、巻首の作者名一覧では「数珠引」となっており、月の歌は数珠を作ること、恋の歌は轆轤を挽くことを詠んでいる。古くは、轆轤挽が数珠珠をも作ったのであろう。

針磨と念珠挽は、ともに舞錐を用いるなどして、細かい作業をする。また、『類船集』に、「針金を延ぶるも轆轤也」(「轆轤」の項)、「針金を延ぶるに轆轤を廻すは木挺なり」(「木挺」の項)などとあり、ここにいう「針金を延ぶ」が、針磨の月の歌の「猶も延べばや針金の」という言葉と関係あるとすれば、針磨と念珠挽とは、轆轤の縁でも結ばれるのかもしれない。

◎月を見は…… 『飛鳥井雅康 職人歌』二番左、針屋の歌に、上句「月みれは影ものへはや」。

◎月を見は猶ものへはやはりかねの 美しい月を見るならば、秋の長夜をさらに延ばしたい、というのである。「延ぶ」に針金を延ばす（針を作る工程の一つか。『新大系』は、巻いた針金を延ばすことと解する）意を掛けるか。「針金の」

から枕詞的に下句の「長き夜」に続く。

◎なかき夜とてもいやはならるゝ 美しい月を見ている限り、秋の長夜とても、おちおち寝ていられようか。

◎いつとなくすゝやのまとの影なれば 「いつとなく」は、和歌では、いつも、の意で用いられることが多い。ここもそのように解してよからう。次の「数珠屋」に、「涼(し)ないし「涼や(か)」を掛け、「いつとなく涼」と続く。と見たい。「新大系」は、「いつとなく」は「引き入りてのみ月を見る」に続くとする。その場合、数珠は、念仏をしたり、仏を拜んだりする時に用いる仏具であるから、「涼(し)ないし「涼や(か)」は、心の澄んだ状態をも暗示していることにならう。「数珠屋」は、「数珠挽」に同じ。「窓の影」という用例は管見に入らないが、「窓の月影」、すなわち、窓から射す月影、ないし、窓から眺める月影のことであろう。下句に「月」があるので、単に「影」と言ったものと思われる。その月影が涼しげだということのである。

◎ひきりてのみ月をみるかな 「引き入る」は、引き籠もること。通常歌に用いる言葉ではないが、数珠を「挽く」の縁で用いたのであろう。ずっと家に引き籠もったまま月を見る、というのである。

◎興なきにあらず 「興」は、歌論用語で、歌の趣向のこと。「左右歌共有興、いとをかし」(天徳四年内裏歌合、十三番判詞)、「左、有興さまなり」(千五百番歌合、百二十三番判詞)など、歌合の判詞でしばしば用いられる。本職人歌合にも、他に、「左、生壁のひるよなきに寄り添ひがたきといふ、いと興あり」(二番、壁塗・椀皮茸・恋)、「右、依有興、可為勝」(三十八番、塩売・麴売・恋)、「左右、非無興」(五十四番、矢細工・飯細工、月)、「左哥、なかつ祓といふ詞をやがて月の祈りに詠める、興あり」(六十二番、禰宜・巫、月)、「現爾也娑婆の秘曲、其の興侍り」(六十六番、連歌師・早歌、月)とある。

◎なきけなきひとこころをつくしはり 「情なき人に心を尽くし」から、「つくし針」と続く。「つくし針」は、筑紫産の針であろうが、未考。『ヴィジュアル史料 日本職人史』^[1]は、博多に輸入された唐針をいったものであろう、とする。なお、本職人歌合四十二番右、櫛挽の月の歌に、「出でやらでいとど心をつくし櫛」という似た表現がある。

◎身つからなとかおもひそめむ (こんな薄情な人を) どうして自分から思い初めたのであろう。「身づから」の「み

づ」に、糸を通す穴の「針孔みづ（針眼）」を掛ける。

◎ぬぎれ 『和訓栞』に「職人歌合に数珠の事にいへり。貫入の義成べし」とする。他に用例を見ないが、この言葉以外に念珠挽に直結する言葉はなさそうなので、数珠のことと見ておきたい。

◎わかたまぐらのふしとなりけれ 白石本は、「けれ」を脱す。「手枕」は、自分が相手の、あるいは、相手が自分の腕を枕として寝る場合についていうことが多いが、「我が手枕」は、「君がせぬ我が手枕は草なれや涙の露の夜な夜なぞ置く〈光孝天皇〉」（新古今集、十五、恋歌五）に典型的に見られるように、相手がいなくて自分の腕に自分が寝る場合についていうのが普通である。こども、その例。手に数珠を掛けているので、手枕をすると、おのずから、その数珠が臥し所になる、というのであろう。『新大系』は、「ふしと」を「節と」と取り、「私の手枕の節となることである」と解するが、意味が通じない。

◎こほりはみつか大事に候 「こほり」は、「小針」で、すなわち縫針のことをいうか。「みつ」は、忠寄本は、「耳」の右に「みつ」と校合。「針孔みづ（針眼）」は、糸を通す穴。針の耳。「大事に候」は、白石本、忠寄本は「大事にて候」。

◎かすとりと七へんの玉、むつかしきぞ 「数取」、「七遍の玉」ともに、数珠の珠名であろう。「数取」は、数珠をつまぐりながら真言を誦したり念仏を称えたりするとき、その数を数える目じるしとなる珠の謂であろう。近世中期の仏教書『真俗仏事編』五には、「又、母珠ノ下ニ一ツノ小珠アルハ、補処ノ弟子ナルベシ。其ノ下ノ十顆ノ記子カズリハ十波羅密ヲ表ス」とするが、近世末期の修験道の書『木葉衣』下によれば、「母珠ヨリ左右ニ各七顆ト二十一顆トノ間ニ、並ニ一ノ小珠ヲ加フ。此レ一百八顆ノ外ナリ。此ヲ常ニハ四天ト云フハ、須弥ノ四方ノ天ニ象ルナルベシ。修要秘訣集ニハ、此ヲ数珠ノ数取ノ珠ト云フ。今時ニ数取ト云フハ、記子ノ事トスレドモ、古ニアラズ、違ヘリ。此ノ名ノ如ク、七遍ト廿一遍トノ数ヲ此ノ珠ニテ取定ル事ナレバ、数取ト昔云ルハ宜ナリ」（『伊良太加数珠』の項）とあり、記子（母珠に取りつけた房に通した数十顆の小珠）のこととする説と、四天（百八顆の数珠で、母珠から両側、七顆目と八顆目の間、および二十一顆目と二十二顆目の間にある四顆の小珠）のこととする説と、両説あったことが分かる。ただし、必ずしも、『木葉衣』に言うように、もともと四天のことを数取といったかどうかは疑問であり、宗派等による

違いもあったかと思われる。「七遍の玉」は、他に用例を見ないので確証はないが、その名から推して、ここでは、これが四天を指すのではないかと思われる。とすれば、この「数取」は、記子のことと考えるべきであろう。いずれにしても、四天、記子とも、一般の珠よりも小さいので、細工がむずかしいであろう。

【繪】

針磨は、無帽で、直垂、袴姿。切り株で作った台の前に座して、櫛状に束ねた多数の針に、舞錐で穴を開けているところ。台の横の箱の中にも針多数。明暦板本は、四角い台。また、箱の中の針を描かない。

念珠挽は、剃髪し僧衣を着る。台の前に座し、左手に舞錐を持つ。右手は数珠の珠をつまんでいるように見える。台の上に数珠の珠数個。台の右に、加工前の四角い数珠珠十個ばかり、同様の数珠珠の入った曲物らしい容器、数珠二連。台の左に弓鋸と材料の木片か石三個。明暦板本は、左手に棒状の木を持ち、右手の弓鋸で切っているところ。台の左には、材料の木片か石三個のみ。類従本は、台の右の数珠は一連。台の左の材料は二個。剃髪し僧衣を着ているのは、寺院との関わりによるのであろう。